

梅鶯仏教壮年会報

第169号
2021年
4月25日

梅鶯仏壮定期総会開催

―新役員決定―

去る3月27日に、令和2年度の梅鶯仏壮総会が開催され、新役員が選出されました。任期は令和6年3月末までの3年間です。

また、令和3年度の行事予定も併せて決定されました。

なお、新型コロナウイルス感染予防のため懇親会は中止となりました。

【新役員】

会長

北村新一郎氏

副会長

田中善博氏

会計

田中 薫氏

監事

森 勝昭氏



永代経法要 六月五日(土)

本年はコロナ感染対策のため、午前中（お勤め・お説教）のみとさせて頂きます。仏壮の皆様にはお参り願います。

お説教講師…石原教人師

令和三年度行事予定

5月30日(日)

例会(17時)

6月 5日(土)

法輪寺永代経法

7月25日(日)

例会(17時)

9月未定

親睦研修旅行

11月13日(土)

報恩講

12月25日(土)

除夜会(11時)

1月30日(日)

例会(17時)

3月26日(土)

海の小石のそのように、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は目にみえぬ。
見えぬけれどもあるんだ
よ、
見えぬものでもあるんだ
よ。

金子み

題材法話

疫病によりて
はじめて死するにあら

蓮如上人が78歳、1492年頃(延徳年間から明応年間)に、疫病が7年間続いたそう

1年ちよつとでうんざりしている私達ですが、7年間しかも原因も分からず、予防や治療薬もない時代ですから、さぞかし大変なパンニック状態だったと思います。

その時、蓮如上人が「疫癘に示された御文章が、「疫癘(えきり)えきり」の御文章」と呼ばれるものです。

『當時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これ死するに疫癘によりてはじめ死するにあらず。生まれはじまり。さのみふかくおどろくなり。まじきことなり』

が、当時多くの方が亡



定まっておりますもので、疫病によつてはじめて死ぬのではありません。驚くことではないので、すよ」と仰つてゐるのです。

実は親鸞聖人も同じようなことをすでに仰つておられます。

あつた1230年頃に起つた鎌倉時代を通じて最大規模だといわれる「寛喜の大飢饉」

があり、その後、正嘉・正元の「大飢饉」というのが起り、多くの人が飢えや疫病で亡くなつてゐます。

その時に親鸞聖人が、ご門徒に宛てられた手紙の中で仰つておられるのが、

「年・今年、老少、あひて候ふら

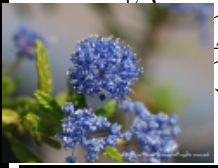


の説きおかせおはし、して候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ」

は、つまり人間が死ぬのであるが、ように騒がれてゐるが、世界だから生まれたものは必ず死ぬので、お釈迦様が詳しく説いて、おられることでは、ないの、です、よ、というこ

と、親鸞聖人も蓮如上人も、一疫病で死ぬことは驚くべきことでは、ない、と仰つてゐる、同じことを、仰つてゐる疫病を軽く見ても、おられる疫病を、根本的なく、一問題を見失つて、はいけません、

です。この私は平生、

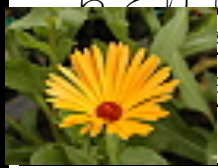


といふ不安に直面した瞬間、「死にたくない」といふ正体が顔を出し、「コロナ、コロナ、ナ」と騒いでしまうのです。

「親鸞聖人は、浄土へいそぎまいり、たきこころのなくともあれば、死なんぞくおぼゆることも、煩悩の所為なり」(歎異抄)

とも仰つてゐます。私も、私たちの煩惱は、それほど根深いのです。煩惱ある私を、そのまゝ救ひ、願が真実な阿弥陀様の本願を、

手立ては、往生させる手立ては、仕上り、陀仏の側で、



救いは、私たちの人生の様々な問題を解決するのではなく、その問題に苛まれる迷いの人生、そのものを根本から解決して、く、蓮如上人は「疫癘の御文章」の中で、先の文に

「阿彌陀如来は、一代の凡夫罪業のわれらたふかくとも、罪はいかほどにたのまん衆生をば、かなら、すくうべし」と仰

は、いよいよ阿彌陀仏を、極楽に往生すべし、と仰せられ、

悦び、念仏者として、皆、本年度もどうか、

